

『科学技術社会論研究』執筆要領

1. 原稿は和文または英文とし、投稿票、チェックリストとともに提出する。投稿票とチェックリストは、学会ホームページから各自がダウンロードすること。2. 原稿は、44字×41行で作成する。
3. 原稿の分量は以下を原則とする。論文については、和文は16000字以内、英文は8000語以内。研究ノートについては、和文は8000字以内、英文は4000語以内。いずれも図表などを含む。
4. 総説、原著、短報には、和文・英文原稿ともに、400字程度の和文要旨、200語以内の英文抄録と、5個以内の英語キーワードをつける。
5. 原稿には表紙を付し、表紙には和文表題、英文表題、英語キーワード、英文抄録のみを記載する。表紙の次のページから、本文を記述する。原稿の表紙および本文には、著者名や著者の所属は記載しない。
6. 和文のなかの句読点は、いずれも全角の「。」と「、」とする。
7. 本文の様式は以下のようにする。
 - A. 章節の表示形式は次の例にしたがう。
章の表示……1. 問題の所在, 2. 分析結果, など
節の表示……1.1 先行研究, 1.2 研究の枠組み, など
 - B. 外国人名や外国地名はカタカナで記し、よく知られたもののほかは、初出の箇所にフルネームの原語つづりを（ ）内に添えること。
 - C. 原則として西暦を用いること。
 - D. 単行本、雑誌の題名の表記には、和文の場合は『 』の中に入れ、欧文の場合にはイタリック体を用いること。
 - E. 論文の題名は、和文の場合は「 」内に入れ、欧文の場合は“ ”を用いること。
 - F. アルファベット、算用数字、記号はすべて半角にすること。
 - G. 注は通し番号 1) 2) …を本文該当箇所の右肩に付し、注の本体は本文の後に一括して記すこと。
8. 注と文献は、分けて記載すること。
9. 文献は原則、次の方式によって引用する。
 - ① 本文中では、著者名 出版年、引用ページのみ記載し、詳細な書誌情報は最終ページの文献リストに記載する。一か所の引用で複数の文献を引用する場合は、(著者名 出版年, 引用ページ; 著者名 出版年, 引用ページ; …)と記載する(文献は; (セミコロン)で区切る)。ただし、インターネット資料等で、著者を特定することがどうしても難しい場合は、該当箇所に注を加え、URLと閲覧日のみを記載するだけでよい。
 - ② 著者名(原著者名)を欧文で記すときは、**Last name**をフルネームで記載し、**first name**はイニシャルのみとする。ただし、同名の著者が複数登場して混乱するときは、**first name**をフルネームで記載する(それでも区別がつかないときは、**middle**

name も書く).

- ③ 文献リストでの表記は、以下の形式とする ("_" は半角のスペース).
- (1) 和文の論文
著者名_年:「論文名」『雑誌名』巻(号), 始頁-終頁.
 - (2) 和文の図書
著者名_年:『書名』出版社.
 - (3) 和文の図書 (欧文の邦訳書)
著者名_年:邦訳者名『邦訳書名』出版社;原著者名_原書書名[イタリック]_原書出版社,_
原書出版年.
 - (4) 欧文の論文
著者名_年:"論文タイトル,"_雑誌名[イタリック]_巻(号),_始頁-終頁.
 - (5) 欧文の図書
著者名_年:_書名[イタリック]_出版社.
 - (6) 欧文の図書 (邦訳あり)
著者名_年:_書名[イタリック]_出版社;邦訳者名『邦訳書名』出版社, 出版年.
 - (7) インターネットからの資料
報告書, 論文等については、(1)~(6)の最後に URL と閲覧日を記載する.
それ以外の場合は、著者名_年:「記事タイトル」, URL (閲覧日) を基本とする.
- ④ 文献は、原則としてアルファベット順に和文, 欧文の区別なく並べる. 同一著者の同一年の文献については, Jasanoff 1990a, Jasanoff 1990b のように a, b, c...を用いて区別する.
- ⑤ 欧文雑誌などの文献を示すときは、他分野の研究者でも容易にその文献がわかるように、分野固有の略記は避ける. (たとえば, *H. S. P. B. S.*ではなく, *Historical Studies in the Physical and Biological Sciences* と表記する。) ただし、あまりにも煩雑になるようであれば、初出箇所ではフルに表記し、2回目以降は略記を用いてもよい.
- ⑥ 本誌 (『科学技術社会論研究』) に掲載された論文を挙げるときは、単に "本誌 第 1 号" などとせず、『科学技術社会論研究』第 1 号 のように表記する.
- ⑦ 著者が複数の時は、次のように書く。
和文の場合: 丸山剛司, 井村裕夫
欧文の場合: Beck, U., Weinberg, A. and Wynne, B.
- ⑧ 執筆のときに邦訳書を用いた (本文中で邦訳書のページをあげている) ときは、上記(3)の形式で文献を挙げる。執筆のときに原書を用いた (本文中で原書のページをあげている) が邦訳もあるときは、上記(6)の形式で文献を挙げる。
- ⑨ 終頁の数値のうち、始頁の数値と同じ上位の桁は、それを省略する。
例 1: × 723-728 ○ 723-8
例 2: × 723-741 ○ 723-41

<例>

[本文]

STS 的研究¹⁾の意義は、次のような点にあると指摘されている(Beck 1986, 28; Juskevich and Guyer 1990, 876-7).

しかし、ペトロスキ(1988, 25)も強調しているように²⁾, ……

[注]

1) <http://jssts.jp/content/view/14/27/> (2016年6月23日閲覧)

2) ただし, ……の点に限れば, 佐藤(1995, 33)にも同様の指摘がある.

[文献]

Beck, U. 1986: *Risikogesellschaft, Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp; 東廉, 伊藤美登里訳『危険社会: 新しい近代への道』法政大学出版社, 1998.

Juskevich, J. C. and Guyer, C. G. 1990: “Bovine Growth Hormone: Human Food Safety Evaluation,” *Science*, 249 (24 August 1990), 875-84.

丸山剛司, 井村裕夫 2001: 「科学技術基本計画はどのようにしてつくられたか」『科学』71(11), 1416-22.

文部科学省科学技術・学術政策研究所 2015: 『大学等教員の職務活動の変化—「大学等におけるフルタイム換算データに関する調査」による2002年、2008年、2013年調査の3時点比較』(調査資料—236), <http://www.nistep.go.jp/wp/wp-content/uploads/NISTEP-RM236-FullJ1.pdf>. (2016年6月23日閲覧)

ペトロスキ, H. 1988: 北村美都穂訳『人はだれでもエンジニア: 失敗はいかにして成功のもとになるか』鹿島出版会; Petroski, H. *To Engineer is Human: The Role of Failure in Successful Design*, St. Martin's Press, 1985.

佐藤文隆 1995: 『科学と幸福』岩波書店.

Weinberg, A. 1972: “Science and Trans-Science,” *Minerva*, 10, 209-22.

Wynne, B. 1996: “Misunderstood Misunderstanding: Social Identities and Public Uptake of Science,” Irwin, A. and Wynne, B. (eds.) *Misunderstanding Science*, Cambridge University Press, 19-46.